

木々の緑の重なって濃い隙間から、久々の五月晴れがまぶしく差し込む陽気だった。病院は、東京郊外の〇市にある単科病院だ。藤田さと美はここに、かれこれ二か月入院していた。5階の作り付けの共用書棚に本を戻していると、横から肩をぼん、とたたかれた。

「いたんだあ。今帰ってきたよ」

振り返ると、真壁恵梨香が笑みをたたえていた。さと美もしぜん口元を緩ませる。

「家に帰ってたの？」

「そう！で、お薬もらったら、また出ていく」

「あら、そうなんだ」

「ここについても、することないし」

恵梨香の屈託ない様子に、ため息まじりに頷く。

「することがあったら、とつくに退院してるよね」

「だよねえ」

だからといって、家にいてもやることなんてないのだけど。さと美は口の裏で小さく呟いた。

東京の郊外の〇市の小高い丘を拓いて立ち並ぶ家々の、いつとう端っこにさと美の実家があった。新興住宅地とは、つまり何も無いということだ。日が暮ればわずかな街灯が頼りの、さびしいところだった。最寄駅から歩けぬ距離ではないが、何しろ景色が変わらない。勾配のきつい道もこたえた。それに、まだ治安が良くなかった。住人よりほかに往来もない道で、ゆつくり、車にあとをつけてこられた時には心臓がバクバクした。大学を出て就職したときには、やっと家を出られると思ったものだ。

(それが、あつという間に)

鬱と診断されて投薬治療がはじまって、薬と睡眠さえ確保できれば仕事は続けていく、とさと美は信じていた。然しそれが困難だから病気なのだ、と思いつくにはもう数年を経ていた。次第に欠勤の数は多くなり、それが人事に見咎められると、もう休職するより道はなかった。「仕事が良くないんじゃないの」とたびたび母は言った。技術者なんて、経験がないうちは体力で補うしかない。明け方ビルの空調がふたたび動き出すまで仕事はするし、床でだって寝る。それが自律神経に失調をきたすことも珍しくはない。しかし「間に合わない」ことがなにより恐ろしかった。今夜眠れて、明朝すこやかに目が覚める、とは限らないのだから。

しだいに割れ鐘をつくような恐ろしい頭痛がさと美を苛みはじめた。鐘は撞かれる毎にますますひび割れてゆく気がした。自分の窮状を訴えるのに、あまりに平板な表現しか出てこないのにさと美は泣きたい気持ちになった。呼吸が乱れ、行き帰りの足取りもおぼつかず、薬の量も増すばかりだった。

「パニック障害を併発している」

と医師は言った。仕事を続けることも、もうできないのだと悟った。

「帰ってらっしゃい」

という言葉に頷くよりなく、そして、そのまま入院した。

「電話あいてるかしら」

恵梨香とさと美の間を割って、蓬髪に皺だらけの小柄な老婦人が顔をのぞかせた。茫洋とした様子で、

「どうぞ、あいてます」

というさと美の言葉も、耳に届いているのか判然としない。

「ベンチ行こう」

と恵梨香が顎をしゃくったので、さと美もあとに続いた。食堂の脇をすり抜けるとき、テレビの音が漏れ聞こえた。ベンチは病室の向かいにしつらえてある。

「退院できそう？」

恵梨香は膝を抱えてさと美をじっと見た。恵梨香の薄茶色の瞳には、何の思惑も見えなかった。

「そうだね、もう夏だからね」

「そうだよねえ」

「でも、退院したらどうしようかなあ」

「そうだよねえ」

当て所もない会話だった。恵梨香は三十六、さと美は今年三十九になる。出会ったのはこの病院だった。中年の婦人に混じると、二人は若くて目立っていた。互いに会話する相手もなかったので、顔を合わせると、どうということもない会話に興じた。緩慢に過ぎていくここでの日常に、抑揚などつきようもなかった。

「ねえ、恋活しようよ」

さと美はふと口にした。

「恋活？」

恵梨香は首をかしげる。

「合コンとかしようよ」

さと美は合コンだなんて、と自分で口にしなから少し可笑しくなった。そんなもの、学生時代以来していない。それにあって、別段おもしろくもない。さらに、私たち、もうおばさんじゃないの。

「そうだねえ」

恵梨香の声はいくぶんかうわずった。恵梨香に恋人がいないのを、さと美は聞いていた。さらに、一人でいるときみしくてやや過食の毛が出てしまうらしい。さと美が知り合って二か月の間にも、恵梨香の体重は上下を繰り返していた。今は落ちているほうで、痩せすぎと言つてよかった。恵梨香は医師のすすめで、漢方を服用しているらしい。

いっぽうのさと美は、さみしさなど、いっこうに感じない生活だった。何しろ多忙を極めていたし、二度の離婚も経験していた。子どもはついぞできなかったが、もし産むのならこれが最後の一年になると思った。

「ねえ、どんな人がタイプなの」

さと美は調子を上げて訊いた。恵梨香はうーん、と唸りながら、

「筋肉質な人が好き」

と笑みをもらした。

「ええー、筋肉質！」

「マツチヨが好きなの。なにかあっても、守ってくれそうな人」

恵梨香にはきつと男兄弟がいらないのだろう、とさと美は思った。有事の折には、連れだつて逃げるのがいちばん効率的に思えた。

「他には？趣味とか」

「うーん、特にはないかな」

「顔のタイプは？」

「唐沢寿明」

「唐沢寿明マツチヨじゃないじゃない」

二人は顔を見合わせて笑った。言うだけはただなんだから、別に構わない。そんなことは、この歳だからどちらも承知の上だ。ただの話のツマのつもりだったが、恋活ってどんなものかしらん。さと美は調べてみようと思つた。

「今日行くんでしょ、早くしなさいよ」

母親がノックもせずにドアの隙間から顔を覗かせるのを、白粉をはたく手を止めて「はい」と応える。さと美は簡単な化粧を済ませて、姿見の前に立った。

赤に柄模様のワンピースが馴染まない気がして少し途方に暮れる。だって、お婆さんみたいな白髪だもの。さと美は小学生のうちから白髪が目立ち始めて、中学のころにはほとんど頭が真っ白だった。子どもの頃から胃腸が弱く、投薬の副作用も疑ったが、全く関係ないとの事だった。地毛を、わざわざ黒く染め直さないと校則にかかるだなんておかしい、と思ったこともある。

(今日は退院して初めてだし、全体的に染め直してもらおう)  
帽子を被って部屋を出た。

ワンピースの裾が風をはらんでふわっと揺れる。過ごしやすい陽気だった。さと美はゆつくりと足を運んだ。

今は合コンも顔も知らない同士でできるらしい。パソコンで職業を入力する段で、さと美は逡巡ののち、「歯科助手」とした。アルバイトでやった経験もあるし、ぼろは出ないだろう。直ぐに、何通かのコンタクトがきた。そのなかに、「旅行代理店勤務」の「学生時代の友人同士」という→さんはいた。恵梨香と相談のうえ、その人にきめた。今週末に新橋で落ち合う約束になっていた。

白壁の潇洒な美容室の扉を引くとからん、と音がした。

「お久しぶりです」

床を掃いていた顔馴染みの女性がブラシを手にしたまま声をかけてきた。彼女はさと美の一つ年上だという。平日の昼日中にこんな若いワンピースを着てきて、と、自分が少し恥ずかしくなる。

彼女はここ数年不妊治療をやっている、と以前聞いた。どうしても子どもを諦めきれないのだという。さと美には子どもはなかった。

最初の結婚相手は、さと美が三十になった年で、さと美の通う囲碁教室の講師だった六つ下の囲碁棋士だ。教室にかよううち、皆で食事をする事になり、今度は二人でと誘われたのがきっかけだった。彼の部屋に誘われていくと、床がのべてあり、他には碁盤と碁石しかない部屋で、彼は正座をしたまま、「付き合ってください」とさと美に告白した。さと美はそのまじめな態度に好感をもち、それを受け入れた。

囲碁棋士はおおよそ五百人ほどの狭い世界で、ほとんどが院生時代からの変わらぬ面子であり、子どもの頃からただ一心にプロを目指して研鑽しあうので、暮らしてみると、驚くほど世間を知らなかった。世間知らずの逸話では、「風呂の炊き方がわからなくて、水風呂に入った」棋士などもあるし、ごみの日がわからなくて、マンションのテラスにごみ袋が積み重なっていた棋士もいる。さと美は結婚して、家の中のほとんどをやったが、碁打ちが手合い料だけで食べていけるといけるのは極少数のトーナメントプロの話なので、仕事はやめず、生活費のおおよそをまかなった。

夫の師匠の家で囲碁仲間を紹介されたとき、一人の棋士が、

「こんな綺麗な人と」

と言った。夫が長年付き合っていた女性は、院生時代を同じくした仲間で、彼女はプロになれず去っていったのを、皆知っていた。女の院生はほとんど例外なく仲間の誰かと付き合っていて、夫も早いうちに女を知っていたので、セックスは慣れていた。しかし、それが懦弱に思えるのか、夫は剣道や空手に打ち込んで、健全たる肉体と心を養わんとしていた。夫はトーナメントプロとして棋戦で活躍しなかったのだ。一方、さと美は、

「今の家庭に子どもができて、私は仕事を辞められまい」

と考えていたので、二人のセックスは、子作りを目的としたそれではなかった。

当時さと美は光学機器のメーカーの情報システム部につとめていたが、スキルの向上に不安を抱いていて、ウェブ業界への再就職を考えていた。しかし、ウェブ業界はどうしても定時に帰るのは難しくなる。夫に相談したところ、猛反対されて、

「俺と仕事とどっちが大事なんだ」

とわめきはじめた。夫はさと美の退社のメールを受けると、必ず駅まで迎えに来る。そ

のまま夕食と朝食の買い物をして、帰宅してから家事をひととおりやって眠りにつくので、この言葉はさと美には甚だ心外なものだったが、夫のあまりの勢いに何も言えずじまいだった。夫は独占欲が強く、

「結婚した女は夜出かけたりしないものだ」

と言つて、女友達との食事会に行くことも禁じた。次第にぶつかるとも多くなつてきて、さと美は体に変調をきたし、最初の入院をした。ところが、夫が病室にきても怒鳴り散らすので、主治医はしまいに家には帰らないように、といつて、退院先を実家にした。通電療法を四回ほど受けたのも、このためだった。夫は株に大金を投じたりしはじめ、その上義父が、

「お前の親に息子が恫喝された」

などと言いついてさと美の親と揉めて、最初の夫とはそれきりである。

「今日はどうなさいますか？」

「あの、いつもよりワントーン明るめるめにカラーしてください」

「はあい」

さと美は置かれた雑誌を広げて、いつもより熱心にファッションのページを繰りはじめた。

土曜日の新橋は人もまばらだった。競馬新聞をジャケットのポケットにつっこんで、鳥打帽の初老の男性が数人脇を抜けてゆく。

(なんだか、一雨きそう)

さと美は勝手の解らぬ街で戸惑いながら時間をつぶすために歩き始めた。駅の庇に沿つて歩くと、ほどなく喫茶店が見えた。喫煙できるのを確認すると中へと進む。待ち合わせ時間にはまだ三十分はゆうにあつた。郊外から来るのだからと、勢い込みすぎただろうか。恵梨香とは改札で待ち合わせる手筈になつていた。

さと美は合皮のソファに体を沈めると煙草に火をつけて煙をふいた。

「さんは三十六だと言つていた。来るのは大学の同期なのだから、皆同じ年くらいのはずだ。さと美は年齢を偽らなかつたけれども、さすがにおばさんが来たらがっかりするだろう。自分は子供がいらないから、同級生たちに混ざると若く見えはするけれど、果たして客観的に私にまだ恋愛できる魅力はあるのだろうか。数か月の入院を終えて顔はどことなくやつれているようにも見えた。体は細かったが、年齢を考えると不健康な気もした。

『着きました！もういますか？』

落ち着きなくコンパクトで化粧の崩れをたしかめてみると、恵梨香から携帯にメールが入つた。

『駅沿いの喫茶店に入ってる』

吸いさしのタバコを消して返信する。恵梨香は煙草を吸わないので、席を移動しなければいけない。さと美はコンパクトをバッグにしまい、ドリンクを持って立ち上がった。いつの間にか雨が降り出したらしい。雨粒が窓にいくつもの筋をつくつていた。

「こんにちはあ」

恵梨香は薄グレーのカーディガンにひざ丈の黒のフレアスカートを履いてやつてきた。わずかに染めた濃茶の髪はストレートにおろしている。間違わないなあ、とさと美は感心した。こういう服装が年齢にも「PO」に合っているのだと知っているのだ。

「雨、降ってきちゃったね」

「私雨靴持ってきた！」

「用意がいいなあ。私はこんなサンダルできちゃって」

さと美は足元のショッキングピンクのサンダルをぶらぶらさせた。色選びのセンスも、恐らく歓迎はされないだろう。それをいうなら、煙草を吸う女だつて、きつと論外だ。仕方がない、私は合コンのために生きていくわけじゃなし、今日一日を凌いだところで染みついたものは変わらない。

「会場で合流なんですよね」

ネット合コンは、条件からピックアップし、コンサルタントに希望を告げて、お互いの都合が合ったら、店の連絡先と予約内容が送られてくるというものだった。当日はコンサルタントも来ないし、進行は自由だ。

「ちゃんとした人だと思うけど」

さと美の声も心細くなった。雨が地面を強くたたたく音が聞こえた。

### 三

古いビルの四階までのぼってエレベーターのドアが開くと、閑を持って余していたらしいウエイトレスがエントランスに姿を見せた。

「あの、予約した加藤ですけど」

とコンサルタントにの名前を告げると、

「こちらへどうぞ」

と促された。洋風居酒屋といったふうで、店内はがらがらだった。

ふたりが通されたのは僅かに壁で隔たれた隅のテーブルで、まだ誰も来ていなかった。

「誰もいないねえ」

「ほんとに来るのかなあ」

と、渡されたメニューに視線を落として囁きあった。なにせ、相手の連絡先はこちらには知らされていない。いくぶんか時間が過ぎたら、コンサルタントに連絡をしなければならぬ。

手持ち無沙汰で互いに携帯をいじりはじめると、

「あの、すみません」

と声がした。顔をあげると、男がひとりこちらを見て、所在なさげに立っていた。

「Jさんですか？はじめまして」

さと美は笑みを浮かべて男を見た。大柄で、やや色白で、短く刈った髪の下、二重瞼のくりつとした眼が二、三度瞬いた。

「いや、僕友人なんです。主催は遅れてきます」

「そうなんですか」

「とりあえず座ってください」

「誰もこないかと思っちゃいました」

さと美と恵梨香に矢継ぎ早に言われ、男は急いで二人の向かいに腰掛けた。

「こんには、藤田さと美です」

「真壁恵梨香です」

「あ、ぼくは石原浩史です。すみません、遅れちゃって」

石原の話で、「というイニシャルは館山の」だということが解った。もうあと五分もすれば会場に着くという。さと美は安堵した。

石原というのは朴訥な人柄のようで、必要以上の話はしない。警戒されているのかと思つたが、館山が合流してもそのままだった。館山は営業をしているだけあって、場を盛り上げるのがうまかった。そして、隣の恵梨香が、館山や石原が何か言う毎に、嬌声をあげるのだ。これには面食らってしまった。恵梨香は酒を一滴も呑んでいないのだから。

「可笑しくて堪らない」

と恵梨香は笑いながら言った。なにか、ソウ状態だった。

店を出ると、それぞれ終電を気にしなければいけない時間になっていた。石原は横浜から来ているというし、館山は川崎だった。気が付けば恵梨香はびったりと石原に寄り添っていた、館山はさつさと先を歩いているので、さと美は館山の背中を見ながら駅まで歩いた。雨はあがっていた。

「ねえねえ、どうだった？」

二人になると、恵梨香は気色ばんで訊いてきた。さと美は口ごもった。

(どうもこうも、なんにもない)

そのまま口にしようかと思つたが躊躇われた。館山の秋にバーベキューに行こうという提案には頷いたし、恵梨香も何処にする？と乗り気だったが、そんなものはその場限りの思いつきだろうと思つた。この歳だもの、もうわかる。しかし身も蓋もない気がした。

「うーん、いい人たちが良かったよ」

とだけ言つた。

「そうだよね！」

恵梨香も頷く。

「恵梨香ちゃんはどのなの。石原さんがお気に入り？」

「うーんどうかなあ」

あれだけびつたりくつついていて、気に入ってないことがあるはずもないのに。さと美ははぐらかされたと思つた。もしかして、けん制されているのだろうか。そういえば石原はラグビーをやっていたのだった。ちつとも唐沢寿明じゃないけど、昔はマツチヨだったかもしれない。

「付き合うならどっち？」

恵梨香は質問を続けた。その二択は、どちらでもなかったが、「館山さんかなあ」と曖昧に答えた。

(でも、二人とも、べつに私を気に入っているふうでもないし)

ずいぶん前、知人が『合コンで相手にされなかった話』をしていた。その子は自分の隣の子にばかり向かいの男が話しかけるので、差別する人間って最低、私がブスだからって、とその男を罵倒したのだという。そりゃあ、さぞかしはらわたの煮えくり返る思いだったろう。わが身に置き換えると、さと美にだって苦痛しかない。しかしそんなこと、思つていたって滅多に言えるものじゃない。そもそも合コンは、平素からの交流を深めに來る場所ではないのだ。……ただ今日はけつして、そんな感じでは無かった。石原も館山も、どちらにも、分け隔てなかった。では分け隔てなかったから、不満なのか、という、終始薄水を踏むような手探りのやりとり、疲れをおぼえただけの気もする。電車は東京駅のホームにすべりこんだ、話はここで打ち切りとなつた。

#### 四

汗ばむ肌に「シャツがべつとりとまとわりついて、目覚めは不快なものだった。アブラゼミが喧しく鳴いているのがきこえる。時計は十二時を回るところだ。

(いけない、また寝すぎてしまった。少し薬を調整しないと)

さと美はベッドから身を起こして、テーブルの上にぼんやり目を遣つた。

そこには雑誌が乱雑に積まれていた。ほとんどが、さと美よりひとりは下の若い子をターゲットとしたものだった。さと美はこれらの雑誌のマイクページを丹念に読んだ。勤めていた頃は、化粧なんて、ポイントメイク程度しかしていなかった。朝は苦手だったし、どうせ帰りは夜も遅いのだからと、ポーチも持ち歩かなかつた。それに、職場に女を持ち込むと少々厄介なことになるのも知っていた。さと美は部署で唯一の女性社員となることもあつたし、偏執的な恋の告白を受けたこともあつた。

顔を洗つて着替えをすませると、眠っている間にメールの着信があつたことに気付いた。見ると、館山からだった。

『昨日はありがとうございます。無事帰れましたか？』

そうだ、連絡先を交換していたのだ。さと美は、

『ありがとうございます！楽しかったです。帰りましたよ！』

と無難な返信をした。直ぐにまた着信の知らせがあつたので、また館山からかと思つたら、恵梨香だった。

『昨日はおつかれさま！石原さんと、お祭りに行くことになりました』

絵文字がふんだんな文面から、恵梨香の浮かれている様子がわかる。なあんだ、やっぱ  
り気に入っていたんじゃないの。さと美は微笑した。

『良かったね！いつてらっしゃい』

さと美も絵文字を入れて返した。ものの数分でまた携帯が点滅する。

『ありがとう。楽しんできます。ところでセールに行きませんか？』

ああ、そうか。もうセールの時期なんだ。

『いいよ！いつ行く？』

待ち合わせに十五分ほど遅れてさと美は到着した。恵梨香は先にショップで物色をして  
いる筈だ。デパートの冷房に生き返った心もちで携帯を片手に恵梨香を探すと、恵梨香は  
靴を試し履きしているところだった。

「遅れてごめんね」

さと美は頭を下げると、いいのいいの、気にしないでと恵梨香は首を横に振った。

「なんだか、似たような靴ばかり買っちゃう」

恵梨香は自分の靴に履き替えると、棚に靴を戻した。恵梨香はいつもフラットな靴を履  
いていた。

「ヒールは履かないの？」

「私、突発性難聴があるから。転ぶんじゃないかと怖くって」

ああ、とさと美は思った。恵梨香が突然床に倒れこむのを入院中に目にすることがあつ  
た。あれはそのせいだったのか。

恵梨香は病院からほど近いアパートに一人で暮らしている。短大を出て、アパレルの事  
務職に就いていたと言ったが、口ぶりから、それはだいぶ昔のことのように思われた。家  
族とは、ほとんど絶縁しているらしい。らしいというのは、恵梨香があまり語りたがらな  
いたためだ。こころを病んだ人たちは、触れてほしくないことのひとつは必ずあるものだ。  
恵梨香は地味な外見そのままの、つましい暮らしをしていた。

「ねえ、お昼は食べた？」

さと美が聞くと、恵梨香は向き直って、「まだ」と答えた。

「先にお昼食べちゃおう。パスタとかでいい？」

「そうだねー、そうしよう」

二人は連れだって歩き出した。

デザートのアップルパイをフォークでつつきながら、さと美は

「で、どうだった？お祭り」

とおもむろに切り出した。今日はその話が聞きたかったのだし、恵梨香もその心づもり  
でいただろうと踏んだのだった。

「楽しかったよー。屋台とか、いろいろ見た。お店もちゃんと予約してくれてたみたい」

「そうなの、石原さんが……」

少し意外だった。そういうことには、あまり気が利かないように見えたのだ。

「今度は花火に行くの？」

「花火？ どこでやるの？」

「なんだか、新潟みたい」

「新潟？」

「結構大きな花火みたいだよ。アーティストも呼ぶみたいで」

恵梨香は大したことではないふうと言った。さと美はすっかり肩透かしをくらった気分  
だった。もつときやあきやあと、声を弾ませるのを期待していたのに、いつもと変わらぬ  
様子だ。

それにしても、新潟の花火となると日帰りではないだろう。現地までのアシはどうする  
のだろうか。

「車で行くの？」

「うん、石原さんが車出してくれるって」

恵梨香はまたもこともなげに言う。さと美はうーん、と唸った。

(石原さん、気合十分だなあ)

石原は横浜でも「はずれのほう」に住んでいると言っていたはずだ。あんなおぼっちゃん風でいて、なかなか行動が素早い。もうお互いに年齢が年齢だからか。

「じゃあ今度は、花火のご報告だね」

とさと美はにやっとした。「そうだねー」とのんきな声で恵梨香がデザートスプーンを口に運んだ。

館山とは、なんとなくメールのやり取りを続けていた。バーベキューはいつ行こうか、今は仕事が忙しいから九月になる、というたわいもないやり取りだった。館山も石原もがつしりとした体躯で、それはやはり、年のせいか多少二人とも腹が前にせり出してはいたが、もつと昔は違ったのだろう。もしかして、ラグビー部で一緒だったのかも知れなかった。しかし別に、さと美はマツチョコが好きというわけでもなかった。

(いい人だとは思うけれど……)

とさと美は館山とのことを前向きに考えてみようか、として、同じところに行きつくのだった。恋愛とはもつと胸を持って余すものではなかったか。とはいえ、前の夫との付き合いに思いをめぐらせてみると、ゆるやかな始まりだった気もする。ときめきもいずれ霧散する。そしてそのあとに、生活が残るのだ。そのことはよく知っていた。もしかして館山も、同じように考えて、自分を誘ってきたりはしないのかも知れなかった。どうも、無邪気になるには年を重ねすぎていた。

『花火行ってきました』

携帯がまた、ぴかぴかと光って、恵梨香からのメールが入っていた。

『どうだった?』

『人が多くて、ホテルがどこもいっぱい。仕方がないから高速のサービスエリアで二人で寝ました。さつき帰ってきて、眠いよー』

あら、ホテルを予約していなかったのか。石原も一寸早いと思ったのかもしれない。しかし、悪くない感じだと思った。三十路も後半のふたりでも、どこか初々しく感じるのは、自分の離婚経験のせいかもしれない。あの場にいたメンバーでそんな経験があるのは、さと美一人だった。さと美は、

(恵梨香ちゃんにはもう石原さんがいるし、もう少し、広げてみようか)

さと美は携帯を取った。

## 五

医師を選んだのは、「病気に理解があるかもしれない」という期待のためだった。「離婚歴あり」だったのは、たまたまだ。SNSをベースとしたいわゆる「婚活サイト」で、なんとなく、感じの良かった地方の勤務医にメッセージを送った。

まさか自分がこのようなサービスを利用するとは思っていなかった。さと美の恋は、常にさと美に近い人間関係の枠に収まっていた。しかし今の自分はおよそ外に用のない人間である。居るべき社会もない。婚活サイトに至ったのは、SNSでの宣伝が目にとまったのと、やはり、自分の年齢を鑑みてのことだった。

サイトは、ベースのSNSのプロフィールに、「婚活用」の自己紹介を付す仕様だった。「婚活用」とは、婚歴、子どもの有無、結婚を希望する時期で、「今すぐにでも」から、「良い人がいたら」までを選択できた。他には最初のデートはどちらが費用を負担するか、といったものまであった。簡単な自己紹介の欄には、病気で療養中であることも書き加えた。

さと美が登録してすぐに、到底読み切れないメッセージが寄せられた。年齢は三十代前半から、五十代までいた。きつと、若くて美しい子なら、プロフィールを閲覧するだけで



も膨大な時間を要するのだろう、と思った。

自分の世代は「アラフォー」で、インターネットでの評判は、芳しくなかった。しかも自分には離婚歴がある。さと美が化粧をするのも、到底若さには太刀打ちできないという思いからだ。メッセージを繰ってみると、『料理はどれくらいできますか?』などと、のっけから訊いてくるものもあった。

「から返信が来るまでものの三分も要しなかつていないだろう。メッセージ着信ありのアラートが表示された。ずいぶん早い。きょうは平日なのだが、非番なのかもしれない。

『こんにちは、メッセージありがとうございます。僕は関東の生まれですが、勤務地が福島なので、さと美さんは東京の方なのに、大丈夫でしょうか?』

相手は、吉村と名乗った。京都の旧帝大の医学部を出て、埼玉で働いていたのを、震災を機に福島へ移ったのだと書いてあった。

『私は福島へ行くのにこだわりはありません。しかしお忙しいでしょうから、お会いするのは大変でしょうか?』

さと美には年子の弟がいたし、母親は福島ではないものの東北の生まれだから、さほど物怖じしなかった。しかし遠方には違いない。

すぐに返信がきた。

『わかりました。ぼくのことを少し知ってもらいたいので、これを見てください』

メッセージには動画サイトのURLと、吉村の携帯のメールアドレスが書いてあった。動画は、吉村が福島に行った当時に地元テレビに取材を受けたときのものだった。あら、写真よりずいぶん太っている。さと美は微笑した。内容は至ってまじめなもので、県下三つの病院を交代にまわって診察し、被災地で全力を尽くす、と締められていた。

吉村から会えませんか、と打診があったのは数日もしないうちだった。

吉村は朝が早いので、さと美が目覚ますころにはだいたいメールが入っていた。おおかたは、ニュースの話だった。意見を求めているふうでもなく、ただ話し相手がいないのだろう、とさと美はうけとった。ごくたまに、『智恵子抄』の話も出てきた。吉村の移動先では、安達太良山が望めるらしいのだ。智恵子の「レモン哀歌」にふれたとき、さと美は『吉村さんには、梶井基次郎のほうがお似合いかもしれませんよ』と、冗談めかして書いた。

話では、大宮まで車で迎えに行くので、ということだった。自分の境遇は話してあるので、気を使って居るのかも知れない。さと美はありがたく申し出を受け取った。

『その日は小名浜で花火大会があるんですよ。水着も持ってくるなら、泳げますよ』

さすがに水着は、と戸惑ったが、せっかくなので、泳ごうと思った。こんなふうに遠出するのはもう何年もなかったことだ。しかしこれが縁になれば、それに越したことはないと思った。

おおよその行程を決めて、さと美は身支度を整え、街に出ようと思った。水着も買わなくてはいけないし、ビーチサンダルもない。婚活って、お金と手間がかかるものね、とさと美はひとりごちた。

持ち物のチェックリストを黒くつぶして鞆のファスナーを締める。さと美が居間に入ると、母親があきれた声をあげた。

「あらまあ、ずいぶん白く塗っちゃって」

二十三でさと美を産んだ母も、還暦を過ぎていた。さと美の服装が派手好みだの、化粧が濃いだの、文句をつけるのももう慣れていた。さと美は実家にいるうちは、

「そんな恰好でおもてを歩かないで」

と言われるので、なるべく簡素な恰好を心掛けたが、お洒落なんてものを楽しめる時間も、もういくらも無いと思うにつけ、気にするだけ無駄に感じていた。しかしさすがに化粧を頑張りすぎたか、と思った。

「だって日焼けするかもしれないもの」

「福島ねえ。大丈夫なの、よく知らない人の車なんかに乗って」  
母親はそれが言いたかったのだった。

吉村と会うことは、もちろん母親にも伝えてあった。一泊してくるのだから、黙って出ていくわけにもゆくまい。さと美は過去に付き合ってきた異性の存在を、しばしば母親に隠していた。同棲のようなことも、したことはあった。「家に連れてきなさい」とうるさく言われるので、そうしてきたのだ。

さと美は何も起こらないだろう、と楽観していたが、さりとてそれを証明する手だてもなく、

「大丈夫でしょう。ちゃんとした人だし」

と振り切るように言った。

「車に乗る前に、写真を撮ってメールしなさいよ。なにかあってからじゃ遅いんだから」  
なおも訴える母親に、わかりました、と頷いて、居間を出て玄関に向かう。

それはやはりぬぐい切れぬ不安でもあった。「婚活」や「出会い系」という言葉はもう世に氾濫していたし、事件も起きていた。だから、~~その~~をベースにしたのだ。さと美も吉村も実名で更新していたし、私たちのつながりは、周りの友人も知っている。けれど、それが本当かどうかを、互いに確かめるすべはないのだった。それを思うと、最初の一步が男の車で、行き先は福島、というのは賭けに思えた。

(怪しいそぶりがあつたら、直ぐに助けを呼ぼう)

そう決めて、玄関のドアを押し開けた。

## 六

待ち合わせ場所に向かう途も、吉村はたびたび、メールを送ってきた。サービスエリアで休みながらこちらに向かっているようだった。メールには、車の写真も添付してあったので、それを保存して母に転送した。

『ついさっきまで、当直で』

と吉村が言うので、申し訳なく思った。

大宮駅のターミナルに降りると、車はすぐに見付かった。あのう、と声をかけて中を覗き見ると、

「乗って乗って。ここには長く停められないんだ」

と急いだ調子で言われて、さと美は慌ててドアを開け、助手席におさまった。車はすぐに発進した。

ハンドルを握る吉村は、黒の薄手のポロシャツにベージュのチノパンを履いて、くせ毛なのか、短めに揃えた髪が方々を向いていた。

「病院からすぐに来たから」

「大丈夫ですか」

「大丈夫、車は慣れるから。移動が多いからね」

信号で、車を停止させると、吉村が改めてこちらを見た。

「なんだか気合い入れてきてもらっちゃったみたいで」

さと美は恥ずかしくなった。タイトスカートにヒールは、やはりまずかったか。

「ぼくはメタボになっちゃって、写真とはだいぶ違うよね」

吉村はステレオにつなげた携帯を弄りながら選曲しているようだった。写真と違う、とは動画を見ても思った。著しく前にせり出した腹と、加齢によるものなのか、顎のラインが肉に埋もれつつあった。顔色も、あまり良くはない。尤もこれは、夜勤明けのせいかもしれないが、さと美にはフォローする言葉が見つからなかった。黙っていた。吉村は、さと美の二つ上の筈だ。同世代から見ても、まあ年相応というところだった。

道中、吉村は饒舌だった。メールのやり取りからも感じていたが、吉村はあまり、さと美のことは訊かないのだった。鬱についても、とくに見識を述べたりはしなかった。携帯

を忙しく弄りながら、これは知ってる？これは？と、蘊蓄を語った。こんな運転で、大丈夫なのだろうか、とさと美は思った。

「僕はもともと、茨城が実家なんで」

語るうち、吉村が言った。

「そうなんですか。ご両親はまだそちらにいらっしやるんですか」

「いるけど、何年も帰ってない。親であるという以上に意味のない人たち」

さらっと発せられたその言葉に、さと美は吃驚した。なにかわけでもあるかもしれないと反問しかけて口をつぐんだ。

小名浜は、狭い入り江で、海の家も一軒しかなかった。脱衣所などというものはないので、駐車場に据えられているトイレで手早く着替えをすませ、トシャツにサンダル姿で行った。数年ぶりに着るビキニだが、体形はさして変わっていないかった。

浜には家族連れが数組いる程度だった。八月の上旬でも、水は冷たく感じるほどだ。それでも日差しは強いので、パラソルを借りた。

「ねえ、砂に体を埋めてもいい？」

笑いながら言うと、

「いいよ」

と即答された。吉村は砂浜の上に横になると、目を瞑り、黙ってさと美に砂をかけられていた。そして、

「僕、職場では天才って言われてるんだけどなあ」

と愉し気に呟いた。吉村のようないわばエリートが、震災の被災地で勤務するということは大変にありがたがられるようだ。さと美は携帯のカメラで写真を撮った。

浅瀬に行くと、吉村は仕返しとばかりに水をすくってかけてきた。冷たい！と悲鳴をあげて、やり返す。吉村が腕をつかんで引き寄せたので、二人はそのまま沖へと移動した。

なんだか学生みたいだとさと美は思った。水は冷たかったが、じき慣れた。ここも震災の時は、大変だった。と吉村は言った。

ひとしきり波に遊ぶと、日が傾きだったので、浜辺へ向かってゆっくり歩き出した。何も言わず、吉村がさと美を抱き上げた。水の中なので、むろん、重さはほとんど感じないだろうが、二人の肌がしっかりと触れ合った。そのまま歩を進めると、吉村は小声で、

「勃っちゃった」

と言った。

もちろん一泊なのだが、吉村の勤務地でもあるので、ひとりで泊まることもあるだろうとさと美は考えていた。しかしその声をきいて、ああ、そうではないのだ、と確信した。会ったその日に肌を合わせることに、さと美は内心動揺した。何の約束も、まだしていないのだ。

さと美は中学生の時、初めて自慰をしようとして、己の陰部のあまりにグロテスクなのに気づき、恐ろしくなって、すぐ指を抜いてしまった。自分だけがこんな奇異なつくりをしているのかとも思ったが、他人に訊ける話でもなかった。さと美は自分は一生セックスできないのではと思った。それ以来、自慰というものをしていない。

しかし高校に上がると、好きな異性ができた。一つ年上の男子バスケットボール部のキヤプテンで、背は低かったが、バスケットがうまく、エースだった。さと美はマネージャーをしながら、流行りの曲を入れたカセットテープを作って、下駄箱に手紙を添えて入れたりなどした。

先輩はさと美を可愛がってはくれたが、同学年の先輩と付き合い始め、さと美の恋は実らなかつた。二年生になると、友人の脇田理世が、

「私の幼馴染の山田晃が、さと美が好きだって言ってるよ」

と言ってきて、しかし肝心の山田晃はさっぱりさと美の記憶にない名前だったので、ふーんと聞き流していた。だが、意識してみると、山田はさっぱりとした顔立ち

で、さと美の好みに合ったので、なんだか話してみたい気になってきた。それを理世に告げると、理世はその足で山田と話を付けてきて、さと美は山田と付き合うことになった。十七歳は、男も女も、自分とは異なる性を持った者への興味で色めき立っていた。さと美も触れてみたいと思っていたし、男を知りたいと思っていた。知った者の、

「大したことないよ」

などという言葉も、妄想を掻き立てた。

初めて山田の家へ招かれたとき、床に延べられた布団の上で、二人は裸になったが、乳房を愛撫されても、さと美は何も感じず、陰部に至っては、ただ痛いだけで、到底ベニスを挿入するどころではなかった。山田もさと美も初めてだったのだ。それから、幾度かセックスに挑み、ようやく挿入を果たしたときは、自棄になった山田がコンドームを外していたので、さと美は直ぐ体を離して、猛烈に怒った。その後改めて挑戦して、さと美は体が縦に引き裂かれるかと思うような激痛を経験し、終わると、シーツを血が染めていた。

初体験の話を理世にしようとすると、理世は、

「待って。わかった。やつちゃったんだ。いいなあ。私も今の彼と、もうすぐなんだけどね」

と、半ば悔しそうな表情だった。さと美は女になったということに、特別な感慨はなかった。ああ、これが大したことないっていうことなのか、と思った。

山田はひとたび体を重ねると、セックスに夢中になった。二人はしばしばホテルへ行くか行かないかで大喧嘩になり、さと美は受験があるんだから、と山田を置いて予備校へ行った。性への興味が満たされただけで、飽きたのか、気持ちが離れたのか、そのどちらもなのか、半年でさと美は山田に別れを告げた。

ホテルからは、併設のゴルフ場が一望できた。海も見えるはずだが、なにしろ暗くて海と空との境界もわからない。目をこらしても仕方がないので、さと美はチェアに腰を落として煙草に火をつけた。

「静かなところでしよう」

吉村はその反対側で、煙をくゆらせていた。医師にしては珍しく、吉村は喫煙者だった。さと美はそれも好ましいと思つて、メッセージを出したのだった。

火花が終わると、吉村は行ききたいところがある、といつて、車を山に走らせてさと美を仰天させた。道の行き止まりは、散歩道になっていた。月と、申し訳程度の街灯が頼りだった。何をするつもりなのか、と身をかたくしたが、外に出ると、吉村は車のトランクからアコースティックギターを取り出して弾きはじめた。そういえばギターを習っていたという話もしていた。かなりロマンティックなところがあるのだと思つた。

きつと吉村は、こういう「婚活」は初めてではないのだろう。それにしても、色々計画をたててくれるのは嬉しかった。

「ねえ、どうして離婚しちゃったの」

それは自然な疑問だった。吉村に気になるところが、ないとは言わない。が、そこはお互いさまだろうし、じき慣れる程度のものだと感じた。

「福島に来てくれなかったから」

と、吉村は言つた。それも、どちらか責められない、とさと美は思つた。しかし離婚まですることはあるまいに。そして吉村は、矢張りさと美のことには触れないのだった。

さと美がベッドに腰掛けると、吉村が隣に座って唇を重ねた。しばらくそうしていて、吉村が体をはなすと、

「ねえ、これって付き合うってことなの」

とさと美は尋ねた。

「一応、そうだよ」

と吉村は即答した。ちつともぴんとこない。こんな呆気なさってあるのだろうか。それとも、こういうものだろうか。「一応」というのも気にかかる。

「ねえ、温泉に行こう」

さと美は立ち上がった。髪が潮を含んでばさばさだったし、なにより少し離れてみたかった。今日会ったばかりだ。

「僕は、一緒に入りたい」  
吉村が口を尖らせた。

「それは無理だよ。大浴場だもの」  
部屋の据え付けの浴室を使いたいという意味だと解ったが、それには気づかないふりをした。

## 七

湯からあがって部屋に戻ると、吉村が窓際で煙草をふかしていた。

「おかえり。ああ、その方がいい」

それは、化粧を落としたことを指していた。自分はそのなになに化粧で変わるほうではないと思うけれど、とさと美は思った。吉村の妻だった女性は、化粧の気がなくて、黒髪で、そこが誠実に見えて良かったのだと吉村は主張していた。そういう女性を娶りたいと思っている男性なんて、山ほどいるはずで、そういう女性が好かれるのは、女も承知のうえなのだ。それでも、たとえばレストランガイドに載るような店ならば、美しく磨かれた女性が隣にいてほしいと願うのも、さと美はちゃんと知っていた。外で素っぴんかどうかなんて、そんなに大したことではない。どうせ、暮らしていればわかることだ。

さと美がベッドに体を投げ出すと、待ち侘びたかのように吉村が覆いかぶさってきた。吉村の体は湯に火照って熱かった。浴衣の隙間からから手を差し入れると、乳房を愛撫した。

(ああ、セックスってこういう感じだっけ)

吐息が漏れた。組み敷かれる体を、掠れ声が行き交うのを、なんとなく懐かしく思った。

「僕はさと美を気持ちよくしたい」

泣きべそをかいたような顔で、吉村が言った。

「もう気持ちいいよ」

「本当に？」

「うん」

そのまま吉村は果て、二人は抱き合ったまま眠りにおちた。

大学に入ると、さと美はインカレのサークルで、同学年の恋人が出来た。≡大学の桂智之は男子校あがり、人が好く、快活で、スポーツもよくできた。女性には初心で、付き合いはさと美が終始リードした。

お互い実家住まいだったので、土日はさと美のアルバイトが終わると、待ち合わせてそのままホテルに行った。決してきれいなホテルではなかったが、何しろ終電ぎりぎりまでの半日をそこですごしても、料金が安かった。

桂はさと美が初めての相手だった。しかしさと美を丁寧にあ撫した。その時、初めてさと美は乳首を舐められるのが気持ち良いと知り、初めて絶頂に達した。十七歳の体では、セックスを知るのに幼すぎたのか、とさと美は思った。

さと美もやり方もろくにわからないままに桂のペニスを口に含んだ。舌に唾液を含ませ、歯を立てぬように、根本から先端までを丁寧に舐め上げた。そののち、啞えて上下に頭を動かした。桂はされるがままになっていて、少し呼吸を荒くしたので、ああ、合っていたか、とさと美は安堵した。若く、無尽蔵な性の営みは、眠りに落ちるまで続いた。

お互いに、何の不満もなく、穏やかに月日が過ぎたが、どこか気が済んだ感じもあった。さと美も桂も、セックスに執着するタイプではなかった。大学を出て就職すると、休みが合わなくなり、そのまま次第に、連絡がなくなっていく。

目が覚めると、浴衣がほぼほほだけけていて、吉村に至っては、裸だった。さすがに恥ぢず

かしくなつて、煙草を吸うために静かにベッドを抜け出した。海が見えた。

思えば吉村はおとといから仮眠しかとっていないのだ、日はとづくに出ていたが、もう少し眠らせてあげよう。

ところが、ライターがカチツというのに、吉村は目を覚ました。しまった、とさと美は思った。

「起きてたの」

「起きたばかり」

吉村も立ち上がると、浴衣を羽織り、窓際へやってきた。並んで煙を吐き出していると、やはり、距離が近くなったとさと美は思わざるを得なかった。

(ああ、しちゃうと、やっぱり変わるんだ)

「ねえ、もう一回いい」

吉村はさと美の顔を覗き込んだ。さと美は「いいよ」と言った。

続けざまの三度目は、ほぼ、ペニスを挿れるだけだった。吉村のタフなものには、さと美も参った。痛みはなかったが、痺れて、感覚もあまりなかった。自分はまだあの頃のように若くないのだ。

ツインのせまいシングルに枕を並べて横になっていると、ふと、

「僕は騙されたんだ」

と吉村が言った。

「騙されたって？」

「前の嫁に」

「どういうこと？」

さと美が訊くと、吉村は息を吐いて、

「僕には三人子どもがいる」

と妙な面持ちで言った。

「え、三人」

子どもがいるとは聞いていたが、だいぶ子だくさんだとさと美は思った。

「そのうち一人は失敗で」

「え、失敗？ 失敗って、何が？」

「できない日だって言ったのに、嘘ついてたんだ。離婚の話が出ていたから、どうにかしようと思つたんだと思う。それで、三人目ができちゃって」

さと美は言葉を失った。

吉村は産婦人科医のはずだ。できない日なんてそんな話、鵜呑みにするとは思えない。

「三人目のお子さんって、いくつなの」

「まだ幼稚園だよ」

離婚は、三人目の子どもがまだ幼稚園にあがるまえの話だろう。

「お子さんたちはどうしてるの」

「僕は大宮にマンションを買ったから。そっちにいるよ。毎月、ごっそり養育費取られる」

吉村は話しながら少し激した様子だったが、さと美は共感することはできなかった。騙されたとか、失敗で、などと言われている子どもが不憫だった。

「でも、子どもができれば離婚しないだなんて、僕はそれも気に食わない」

何処か誇らしげに、吉村はそう言った。

## 八

恵梨香と会ったのは、恵梨香の誕生日の一週間だった。人波を縫うように進むと、いつもの売店の前に恵梨香は居た。ちょうど、時間ぴったりだった。

「まずお茶する？」

「そうだねー」

駅脇のコーヒージョップに向かう。さと美はコーヒーが飲めないので、紅茶を頼んだ。腰を落ち着けると、どちらからともなく「どう？」という話になった。

「会ってるの？石原さんとは」

「仕事が大変みたいで、土日どっちも休みってことはないみたい」

石原は大手コンピュータメーカーの営業をしていた。さと美はその職種の大変さを現場で見てきたので、「ああ」と頷いたが、恵梨香にはわからないようだった。

「なんだかねえ、愛を感じない！」

恵梨香は不満げにこぼした。

「え、どうして」

「仕事終わっても、メールが来ない」

「自分から出せばいいじゃない」

「なんだか負けたみたいで、嫌だ」

恵梨香は真剣に訴えた。さと美は泡をくつた。なんだかかつての自分が責められているような気さえる。

「だって、来週は誕生日でしょ。会うんじゃないの？」

「誕生日訊いてこないんだもん」

「言えればいいじゃない！」

「恥ずかしいし、スルーされたらショックでしょ」

「それはまあ……」

でも、付き合っていて恋人の誕生日を忘れる男なんて、ざらにいる。さと美は長年自分の誕生日は有休をとって休むことにしていたが、そんなことをしている同僚というのはついで知らないし、自分が休んだところで、恋人にはいつも通りの平日だ。

「男の人にとって、誕生日ってそんなに大きなイベントじゃないんじゃないかなあ」

「えー！誕生日は大事だよ！クリスマスと誕生日は大事！」

「だったら、自分から会おうって言った方がいいよ」

「えーそうかなあ」

「誕生日は私もランチ行こうよ！あとプリクラ撮ろう」

恵梨香は少し、過食が進んでいるようで、「太った」を繰り返していた。

「さと美さんはどうなの？」

矛先が自分に向いたので、さと美は唸った。

あれからも吉村とメールはしていたが、あの言葉を聞いてから、どうにも不遜な印象がぬぐえずにいた。彼の思い描く冒険活劇の主役を張るには、吉村は社会的責任がありすぎるし、それを十分に果たしているとも思えなかった。無頼を気取るには、あまりにもスノブなのだ。「うーん。やっぱりダメかも」と苦笑いをした。

別れて帰路につくと、恵梨香からメールが入っていた。『この間、館山さんとご飯に行ったんだけど、それも石原さんに言わないといけないかなあ』というものだったので、一読してさと美は眉をひそめた。

どうして館山と食事に行くのだろう。石原は館山が連れてきた人間だ。知られぬ筈もあるまいに。まして、恵梨香と石原はもう「しちゃって」いた。

『言わないでいいんじゃない』

とさと美は打った。どちらが誘ったか、なんてことは些末なことだ。館山は恐らく、何も知らないのだろう。石原の耳に入ったらやぶへびだ。恵梨香も断ればよいのに。

未読を手繰っていくと、館山からの、『今度、ご飯でも行きませんか』というメールまできていて、これは無視を決め込むことにした。自分まで恵梨香とややこしいことになってはかなわない。

さと美が中学二年生のとき、仲の良い友人とクラスがばらばらになって、クラス内で既

にできあがっている雰囲気になじめずにいたさと美は、同じように一人でいる、森ちかというクラスメイトとお昼を一緒にするようになった。

さと美はその頃、美術部で、放課後はいつも美術室で友人と一緒に漫画を描いたりなどして楽しく過ごしていたが、やはり授業は長いので、早く三年になりたいとばかり思っていた。それが分かったのか、一部のクラスの女子に、さと美はスケープゴートとして目をつけられた。さと美をいじめたのは、同じクラスになったこともない、言葉すら交わしたことがない人たちだった。

中心核の長谷部美智子は、色が白く、割に大柄で、バレー部に入っていた。ある日さと美がトイレで用を足していると、ドアの外から長谷部らの声がする。どうやら聞き耳をたてているらしく、

「チヨボチヨボだつて」

とくすくす笑っている。自分なら、到底思いつかないやり方だ。さと美は怒りよりも、気持ちの悪さを感じた。

そんなことがひと月も続いたある日、お昼を食べようと思うと、ちかは長谷部のグループに机をくっつけている。長谷部が誘ったのだと直ぐにわかった。そして、ちかは飛び火を恐れて、さと美に話しかけてこなくなつた。さと美は孤立したが、修学旅行の班分けで、さと美に声を掛けてきたのは長谷部だった。修学旅行は全日生理と重なってしまい、鈍痛と眩暈と、そして、早めに床をとったさと美への、

「やだあ、生理臭い」

という長谷部の嫌らしい笑いなどで、最悪な思い出になった。

そのうちさと美は、一人で手早く弁当を済ませ、隣のクラスの友人のところ遊びに行くという気晴らしを思いつき、それを実践した。しかし、同性への恐怖は、さと美の深いところに刻まれた。恵梨香も、あのソウ状態の下に、恐ろしい秘密を巧みに隠している気がした。

## 九

小此木良彦の名前は、漠然と覚えていた。果たしてネットで検索すると、ウィキペディアが表示された。記憶どおり、小此木は何年も婚活を続けて、その手の本も出していた。彼にしたのは、未だ成婚に至っていないからだ。さすがに既婚者にメールを出すのは躊躇われた。

小此木はふだんは富山で大学の講師をしている。さと美が知ったのは、たまたま病院の待合で手に取った漫画の一話だった。小此木は作者と編集者とお見合いパーティーに参加して、そこでの振る舞い方を語っていた。著作には目を通していなかったが、そのルポルタージュを読んだ限りでも、女性に対しては、かなり辛口だった。さと美は外部リンクに飛び、ごく簡単なプロフィールと、最近婚活をはじめました、という経緯をメールにしたためた。なにせ距離があるし、学者というものはそうそう時間も無いだろうと思つたので、期待はしていなかったが、翌日メールボックスには、

『丁度東京まで行く用事があるので、会いませんか。婚活について、いろいろお話ししますよ』

と返信がきていた。しかも、指定されたのは今週末だった。さと美は、

『ぜひ、お願い致します』

とメールを入れた。

さと美は写真を添付しなかったが、良いのだろうかと思つた。だが、写真より劣る、と思われるのも、なんだか癪だった。小此木本人への興味というより、婚活のゴシップに興味があった。

秋物に袖を通すには、蒸し暑い日だった。それでも盆が過ぎて、この頃は日が落ちるとつめたい風が吹くので、長袖のブラウスを着た。



小此木とは、新橋で約束をしていた。ひと月ちよつとの間に、二度も新橋に行こうとは思わなかった。しかも、また一面識もない人だ。金曜日の夜なので、先日とは勝手が違うだろう。電車に揺られながら、さと美は携帯のメールを見た。昼前に、あちらを出た、十八時には用事も片付きます、という連絡がきていた。ついで写真は送らなかったが、さと美は今日の服装を教えた。

駅の売店の前で待っていると、ややもして、「あのう、藤田さんですか」と声をかけられた。小此木は小柄で、緑のポロシャツから伸びた腕は白く、細面に落ちくぼんだ目がかにもおとなしい印象だった。この人が、女性をデブだのブスだのババアだのと言うのか、とさと美は少し意外だった。

小此木が知っている店があるので、と言った先は、ほとんど銀座だった。小此木はやや前のめりに、背中を曲げて歩いた。半歩遅れて、さと美が続いた。

店に入ると、先客から少し離れたテーブルに通された。これからする話が話なのだから、ちようど良い、と思った。小此木はおしぼりで汗を拭きながら、

「どうですか、婚活は」と訊いてきた。

「なんだか疲れますね」

これは偽らざる本音だった。別段人見知りではないさと美も、はじめての対面には緊張はする。それは女が持つ警戒心であったり、精神の不調であったり、勿論年齢せいでもあった。

「僕は結構、婚活にハマるタイプだったんですよ」

「人と会おうのが好きなんですね」

「そうかも知れません」

「今は富山で婚活されているんですか」

「そうですね」

小此木は、身を乗り出すでもなく、訊かれたことに淡々と答えるだけで、場数を踏んだ人間とはとても思えなかった。さては自分がきて、あてが外れたかな、とさと美は不安になった。「いろいろ」らしい話も、ほとんど聞けなかった。途中、「藤田さんは僕の本読んでいないですよ」と何度か念押しされた。そして誘われるまま、喫茶店へと行った。

「実は僕、小説を書いているんですよ」

「へえ、どんな小説なんですか？」

「僕はボクシングが好きなので、その話を書こうと思って」

小此木のブログに、そんな話もあったかもしれない。しかし小此木のブログは、ごくごく短い報告で、富山の天気はどうだとか、体調がどうか、内容も似通っているので、判然としなかった。

「へたな小説より、絶対面白いですよ。出来上がったから見せますよ」

国文学を学んださと美としては、へたな小説って、たとえばどんな、と尋ねたい気もしたが、さすがに無粋に思えて、止めておいた。他にも、

「僕のこの髪、かっこいいでしょう。かつらなんです。おしゃれ用の」

と、返答に詰まることも言った。店を出ると、

「東京駅まで歩きましょう。僕のホテルもそっちなんです」

と小此木は言って、手を繋いできた。さと美は好きも嫌いも無かったが、にべもなく振りほどくこともできず、そのまま並んで歩いた。

「どうして私と会う気になったんです？」

と尋ねると、小此木は前を向いたまま、

「メールで連絡を取ってくる女性は、自分に自信がある方が多いんです」

とわかるような、わからないような持論を述べた。ただ、自信を向こう見ずと言い換えるなら、当たっていると思った。しかしそれでは会う理由にならない。メールを送ってくる女性は、自分に興味があるのがわかっているからだ、とさと美は解釈した。そして、こ

うして連れだって歩くことは、よくあることなのだろうというのは、小此木の迷いない足つきからでもわかった。

「明日も会ってくれますか」

別れ際に、小此木は言った。

「分かりました」とさと美は答えた。

十

髪を洗って自室へ戻ると、携帯のライトが点滅していた。一件は恵梨香から、もう一件は小此木からだ。小此木には、帰宅した折に御礼のメールを送ってあったので、恵梨香のメールを先に読んだ。

『昨日はごめんなさい。さつき家に帰ってきました』

昨日は恵梨香の誕生日だった。恵梨香はその前日まで、石原に誕生日を言うのを渋っていた。さと美が知らぬものは祝えない、とこんこんと説いたので、ようやく恵梨香は石原にメールを出せたようだった。石原から、『仕事がどうなるかわからないけど、会おう』という連絡がきたと聞き、さと美も胸をなでおろした。

昨昼あらわれた恵梨香は、

「ごめんなさい、今連絡があつて、石原さん午後半休とつたみたいなの」と頭を下げた。

「え、半休つてことは、これから会うの？」

「一度家に着替えに帰るから、一時間ぐらいは時間があると思う」

詳しく訊くと、石原は車で恵梨香の家まで迎えに来ると言う。慌ててランチを済ませブリクラを撮って、びったり一時間で、恵梨香は反対側のホームに消えていった。「ごめんなさい」は、そのことだろう。

『私は気にしないからいいよ！良かったね。どうだった？』

『素敵な誕生日でした』

あれだけ大騒ぎしていた割には、なんだかそっけない返事だった。しかし恵梨香が自分にすべてを話すわけではないことに、さと美ももう気付いていた。そしてさと美も、同じだった。自分が小此木と会ったことを、さと美は黙っていた。もつとも、小此木の名前を出したところで、恵梨香が知っているはずもない。

明日をどうしよう、という考えが巡った。小此木は東京に二泊するので、日曜の昼の列車に乗るまで時間がある。小此木が口にしただけで、自分をブスだのババアだの思っているかも知れないという憶測は端に置いておいて、さと美は小此木といる間、禁煙を守らなくてはいけない、ということが最も苦痛だった。今日行った洋食店も、喫茶店も、喫煙者かどうか訊かれなかった。はじめから全席禁煙なのだ。さと美の喫煙には、場つなぎの意味もあつたので、参ってしまった。小此木には、嫌煙家ととられる発言もあつた。

考えながら、さと美はこれ以上は眠れなくなる。と思った。睡眠剤には慣れがあつて、常用していると効きが薄くなる、と聞いていた。さと美は、服薬なしには、ちつとも眠くならない自分をよくわかつていた。母親は、

「死ぬわけではあるまいし」

というのだが、不眠が続くと、神経がむき出しになったように、些細な物音でも大きく聞こえ、酷い頭痛と、手足の痺れがくるので、それは耐え難かった。寝つきがとくによくないので、寝る前が一日で一番薬を飲んだ。

さと美は二十七の時、囲碁棋士との飲み会に参加して、そこで、当時はタイトルホルダーであった韓国人の金に見初められた。

翌日からのぼせたようなメールがきて、さと美は押し切られるように三鷹で同棲を始めた。金は十四で日本にきていて、十七でプロになった。家族はソウルにいた。明るく、よく喋る男で、子どものような落ち着きのなさがあつたが、やはり内心は孤独なのか、付き

合ってしばらくはさと美にべったりだった。さと美は同棲にあたって、自分の両親に金を紹介し、結婚の約束もしていた。

そうして二年も経った頃、さと美が仕事を終えて帰ると、自宅の留守番電話が点滅していた。金が帰ってきて再生ボタンを押すと、韓国語だった。さと美は韓国語の勉強もしていたが、金が流暢に日本語を話すので、役に立ったことは実はない。留守番電話も早すぎて聞き取れなかった。金は聞き終えると、妙な面持ちをしていた。

それから十日ほどが過ぎた晩、金がさと美より遅く、スーツ姿で帰ってきた。今日は囲碁の仕合はないはずだが、テレビで解説の仕事でもあったのだろうかと思っていると、金はしきりに、

「ごめんね」

と謝りはじめたので、さと美は吃驚した。

「どうしたの」

と問うても、訳を言わなかった。

いざ結婚という段になって、さと美は「家庭に入ってほしい」という金の頼みに従って、仕事を辞めた。二十代最後、丁度昇進の話も出ていて、上司からも、

「一度辞めちゃうと、もう戻れないよ、いいの？」

と念を押されたが、金が家事全般まったくだめなので、共働きで、というのは、さと美に負担がかかりすぎた。さと美は深夜に、仕事の電話にたたき起こされることもあったのだ。

金は、性的にほとんど不能だった。年齢はさと美より二つしか違わなかったが、B、D、C、F、G、H、I、J、K、L、M、N、O、P、Q、R、S、T、U、V、W、X、Y、Z、AA、AB、AC、AD、AE、AF、AG、AH、AI、AJ、AK、AL、AM、AN、AO、AP、AQ、AR、AS、AT、AU、AV、AW、AX、AY、AZ、BA、BB、BC、BD、BE、BF、BG、BH、BI、BJ、BK、BL、BM、BN、BO、BP、BQ、BR、BS、BT、BU、BV、BW、BX、BY、BZ、CA、CB、CC、CD、CE、CF、CG、CH、CI、CJ、CK、CL、CM、CN、CO、CP、CQ、CR、CS、CT、CU、CV、CW、CX、CY、CZ、DA、DB、DC、DD、DE、DF、DG、DH、DI、DJ、DK、DL、DM、DN、DO、DP、DQ、DR、DS、DT、DU、DV、DW、DX、DY、DZ、EA、EB、EC、ED、EE、EF、EG、EH、EI、EJ、EK、EL、EM、EN、EO、EP、EQ、ER、ES、ET、EU、EV、EW、EX、EY、EZ、FA、FB、FC、FD、FE、FF、FG、FH、FI、FJ、FK、FL、FM、FN、FO、FP、FQ、FR、FS、FT、FU、FV、FW、FX、FY、FZ、GA、GB、GC、GD、GE、GF、GG、GH、GI、GJ、GK、GL、GM、GN、GO、GP、GQ、GR、GS、GT、GU、GV、GW、GX、GY、GZ、HA、HB、HC、HD、HE、HF、HG、HH、HI、HJ、HK、HL、HM、HN、HO、HP、HQ、HR、HS、HT、HU、HV、HW、HX、HY、HZ、IA、IB、IC、ID、IE、IF、IG、IH、II、IJ、IK、IL、IM、IN、IO、IP、IQ、IR、IS、IT、IU、IV、IW、IX、IY、IZ、JA、JB、JC、JD、JE、JF、JG、JH、JI、JJ、JK、JL、JM、JN、JO、JP、JQ、JR、JS、JT、JU、JV、JW、JX、JY、JZ、KA、KB、KC、KD、KE、KF、KG、KH、KI、KJ、KK、KL、KM、KN、KO、KP、KQ、KR、KS、KT、KU、KV、KW、KX、KY、KZ、LA、LB、LC、LD、LE、LF、LG、LH、LI、LJ、LK、LL、LM、LN、LO、LP、LQ、LR、LS、LT、LU、LV、LW、LX、LY、LZ、MA、MB、MC、MD、ME、MF、MG、MH、MI、MJ、MK、ML、MM、MN、MO、MP、MQ、MR、MS、MT、MU、MV、MW、MX、MY、MZ、NA、NB、NC、ND、NE、NF、NG、NH、NI、NJ、NK、NL、NM、NO、NP、NQ、NR、NS、NT、NU、NV、NW、NX、NY、NZ、OA、OB、OC、OD、OE、OF、OG、OH、OI、OJ、OK、OL、OM、ON、OO、OP、OQ、OR、OS、OT、OU、OV、OW、OX、OY、OZ、PA、PB、PC、PD、PE、PF、PG、PH、PI、PJ、PK、PL、PM、PN、PO、PP、PQ、PR、PS、PT、PU、PV、PW、PX、PY、PZ、QA、QB、QC、QD、QE、QF、QG、QH、QI、QJ、QK、QL、QM、QN、QO、QP、QQ、QR、QS、QT、QU、QV、QW、QX、QY、QZ、RA、RB、RC、RD、RE、RF、RG、RH、RI、RJ、RK、RL、RM、RN、RO、RP、RQ、RR、RS、RT、RU、RV、RW、RX、RY、RZ、SA、SB、SC、SD、SE、SF、SG、SH、SI、SJ、SK、SL、SM、SN、SO、SP、SQ、SR、SS、ST、SU、SV、SW、SX、SY、SZ、TA、TB、TC、TD、TE、TF、TG、TH、TI、TJ、TK、TL、TM、TN、TO、TP、TQ、TR、TS、TT、TU、TV、TW、TX、TY、TZ、UA、UB、UC、UD、UE、UF、UG、UH、UI、UJ、UK、UL、UM、UN、UO、UP、UQ、UR、US、UT、UU、UV、UW、UX、UY、UZ、VA、VB、VC、VD、VE、VF、VG、VH、VI、VJ、VK、VL、VM、VN、VO、VP、VQ、VR、VS、VT、VU、VV、VW、VX、VY、VZ、WA、WB、WC、WD、WE、WF、WG、WH、WI、WJ、WK、WL、WM、WN、WO、WP、WQ、WR、WS、WT、WU、WV、WW、WX、WY、WZ、XA、XB、XC、XD、XE、XF、XG、XH、XI、XJ、XK、XL、XM、XN、XO、XP、XQ、XR、XS、XT、XU、XV、XW、XX、XY、XZ、YA、YB、YC、YD、YE、YF、YG、YH、YI、YJ、YK、YL、YM、YN、YO、YP、YQ、YR、YS、YT、YU、YV、YW、YX、YY、YZ、ZA、ZB、ZC、ZD、ZE、ZF、ZG、ZH、ZI、ZJ、ZK、ZL、ZM、ZN、ZO、ZP、ZQ、ZR、ZS、ZT、ZU、ZV、ZW、ZX、ZY、ZZ

さと美が金の家にいるようになると、金はしばしば家をあけた。終電には帰ってくるのだが、何か様子がおかしく、ろくに口も聞かず寝てしまったりもする。そしてとうとう、金は別れ話を切り出した。金はさと美のこういうところが気に入らないと、ずらずらと例を上げ、さと美は泣きながら別れを承諾した。

さと美が一度実家に引き取り、改めて荷物を取りに来ると、金はちよつと出てくる、と行って外へ行ってしまった。さすがに居づらいのだろうと、荷物をあらかた整理して、金の帰りを待ったが、日が暮れても戻ってこない。痺れをきらして携帯に電話をかけてみると、

「今新宿にいる」

という。さと美はそこではじめて、金の裏切りに気付き、金を罵倒した。あの時の留守番電話は見合いのすすめ、相手は同じ韓国人だった。金はさと美の存在を自分の親にも話していたが、やはり民族の違いもあったのだろう。さと美は仕事を辞めてしまっていたので、途方に暮れた。「死にたい」とはじめて口にしたので、親も慌てて病院を探した。これが鬱病のきっかけだった。

さと美は薬を飲み下すと、部屋を真っ暗にした。

昼少し前に『池袋にしましょう』というメールがきた。今日も昼間は用事がある、と小此木は言っていた。どうやら、編集者と会っているらしかった。件の小説の話かもしれない。

さと美は池袋も、たいして知らない。しかし時間を潰すところはいくらでもあるだろう。『わかりました』と送った。

連日の外出は少しこたえた。さと美は元来、体力のあるほうではない。それに今は実家住まいだ。次にここを出るときは、また結婚するときだろう。仕事が無くなった今、それは動かないと暗くなった。

小此木に対して、心ときめくことはまるで無かった。小此木のまことには、何一つ触れ

ていないと思ったのだ。

移動中に、恵梨香からメールが入った。『なんだか、うまくいかない』。そういった内容だった。さては誕生日に喧嘩でもしたのかと思いきや、そういうわけでもないらしかった。プレゼントはなかったけれど、横浜の、結構いいホテルに泊まったという。『半休をとって彼女の誕生日を祝ってくれるだなんて情熱的じゃない』とさと美は返事をした。昔の自分でも、恋人のためにそこまではしない。すると、『まだ彼女じゃない』と、意外な答えが返ってきたので、驚いた。

『お付き合いをしているわけじゃないの』

『はっきりしない。こちらからは聞けないし』

『でも、聞くしかないじゃない』

『うーん』

恵梨香は渋った。「負けた気がする」のだろうか。体を許して、自分の立場も判然とさせないようでは、まずい気がする。それはただの「させてくれる」女だ。

石原はしばらく仕事が忙しく、次の約束はできないらしかった。次に会うときには、話をする、と恵梨香はやっと言った。乗換駅まであとひと駅だった。

## 十一

小此木と待ち合わせると、夕食を取ろうとデパートの上のレストランに入った。やはり、禁煙だった。

話題を探すのに、苦労した。スポーツの話になって、小此木は散歩ぐらいしかしていないといっているので、

「私はゴルフをやっていたことがあって。お付き合いしていた人の影響なんですけど」と言うのと、

「そういう話ほしないでください」

と、すぐに低い声で打ち切られた。小此木は男の影に過敏に反応した。さと美ははじめ、小此木の正体に触れた気がした。

デパートを出ると、サンシャインの展望台に行きましよう和小此木は言って、また手を絡めてきた。さと美は何も言わず、そのまま歩いた。展望台はすいていた。さと美は生まれも東京だが、展望台には滅多に來ないので、知っているビルを見つけては、

「ああ、これは六本木のほうなんですわ」とはしゃいでいた。

小此木は終始落ち着きなくあたりを見ていたかと思うと、いきなりさと美を抱きすくめて、口をつけてきた。

「やめてください、こんなところで」

「大丈夫、誰もいないから」

と、抱く腕に一層力をこめて、また顔を近づける。誰もいないなんて当たり前だろうとさと美はうろたえた。一体、自分とこの男の間に、何の煩悶も芽生えていないのを、さも段階を踏んでいるように体裁だけつくろうのは滑稽だった。

そのうち、足音が近づいてきた。小此木は体を離れた。

さと美は小此木の胸をときめかせるような言葉は、ついぞ口にしていない確信があった。「子どもが欲しい」というのに、つけこまれたのだろうか。早く帰りたいかった。展望台を出ると、

「少し遠回りをしながら駅に向かいましよう」

と小此木が言った。歩くうち、ホテル街の看板が見えてきて、まずい、と思った。そのうちの一方で、小此木は足を止めた。

「入りましよう」

「それはダメです」

さと美は笑みを浮かべていたが、体はこわばっていた。

「責任は取りますから」

貴方と、責任を問わねばならぬようなことをするつもりはない、と苦々しく思った。

「そういうことじゃありません」

と突っぱねた。

「僕の子どもを産んでくれませんか」

なおも小此木は食い下がる。あろうことか、小此木は避妊もしないと言っているのだ。嫌悪感がこみ上げてきた。

「子どもを産むつもりはありません」

さと美の顔から笑顔が消えた。

「お願いします！」

とうとう、小此木は頭を下げた。さと美はあまりのことに絶句した。四十七の男が、ラブホテルの前で何をしているのか。こんな風に懇願されるのは生まれて初めての経験だった。愛されているのだ、とは微塵も思わなかった。

「やめてください。恥ずかしい。何を言われようと、入りませんから、もう帰りましょう」

きつい調子で言うと、小此木はようやく顔を上げて、引き下がった。手を繋ぎながら、駅までの道を急いだ。

「できちゃった結婚は嫌なんです」

さと美は苦し紛れに言った。

「それぐらいしないと、間に合いませんよ」

と小此木は言った。さと美は何も言わなかった。駅が見えてきた。

自宅に帰ってきてきて、ベッドに横たわると、ため息が漏れた。まったく、あんな人は空想の産物だとばかり思っていた。

小此木の著書を読んでいたら、そこに幻想（ゆめ）も生まれていたかもしれない。小此木ははじめから実体だった。そして、なんの影も落とさなかった。

携帯がこまかく震えた。小此木からだった。

『また明日も会ってくれませんか』

『すみません、明日は仕事を休めません』

さと美は嘘をつくのを申し訳なく思ったが、小此木と会うのに使う時間がもう惜しかった。

翌昼、小此木から、

『いろいろな考えましたが、ここでお別れにしましょう』

というメールがきていた。まるで恋人への別れ文だ。苦笑しながら、

『分かりました。お気をつけて』

と返信した。

## 十一

恵梨香と会う頃には、日が落ちるのもすっかり早くなっていた。

「お別れしちゃった」

と開口一番、恵梨香は言った。

「そうなの、石原さん、あんなに熱心だったのに」

さと美はうまくいくとばかり思っていたので、嘆息した。

「そういうのが好きなんだって」

と恵梨香はカップに口をつけた。

「そういうのって？」

まさかセックスフレンドが欲しかったわけでもなからう。さと美の知っている石原は、

ごくまじめな、平均的な男性だった。

「女の子に尽くすのが」

ああ、とさと美は思った。石原の勤務地は都心だったし、家も横浜だったけれど、恵梨香の最寄り駅までいつも会いに来ていたという。恵梨香だって東京だが、決して便のいい場所じゃない。最後のその日も、恵梨香は半ば強引に自宅へと誘ったという。

「でも、尽くして、何か違うと思って、それで冷めちゃうんだって。今までもそうだったんだって」

恵梨香はカップをソーサーに戻した。

「付き合わなくてもいいから、今のまま会えないか、とも言ったけど、無理みたい」

さと美はぎよっとした。そんなことをしたって、気持ちが変わることはあるまい。小此木とのキスが自分に何の感慨ももたらさなかったように、重ねても、無味ということはあるのだ。しかし、恵梨香は体を男への切り札のように考えているらしかった。

「石原さん、仕事だって言って、家で寝てたりもしたって」

「それは……」

決定的な言葉だと思った。そこまで言わせるからには、恵梨香も相当粘ったのだろう。さと美という恵梨香は、いつも曖昧で、主体性がなかった。けれど、合コンの席での媚態をみるに、きつと、男といるときはそうではないのだ。

「お別れの時も、駅まで手を繋いでいって、悲しかった」

「そうなんだ……」

恵梨香は悄然としていた。

吉村とのやりとりは、続いていた。おそろしく長いメールは、たまにきた。『子どもたちのために』相馬地区に、病院を作りたいのだとも言っていた。プレゼンテーション資料にも目を通したが、スキームよりも理想論が綴られていて、まるで学生の書くものに見える。さと美は一読ののち、貴方はまず、奥さんと和解して、子どもたちのためによりき父になるのが先なのではないの、と鼻白んだ。

吉村はじぶんで自分の話に興奮しているようで、マザーテレサの言葉やら、パッチ・アダムスの話を聞かせた。賛同者をもとめて、東京にもよくやってくるようになったが、はかばかしくないようだった。

ある日ふと思いついて小此木の著書のレビューにざっと目を通してみると、大方は酷評とあって良かった。一冊買い求めてもみたが、まるで共感できないことに、さと美は吃驚した。小此木はぼう大な数の人と会い、その結果、こんなことを学んだ、ということを書いているのだが、「ええ？そこなの？」といちいち首をひねらざるを得なかった。なかに、自分がそうされたように、出会ったその日のうちに手を繋ぐことや、メールの返信は、仕事よりも優先させるべき、なども書いてあり、それもまた信じられない思いだった。なにより、結婚とは何か、恋愛とは何か、婚活とは何か、そういった定義がまるでないのだ。とにかく身ぎれいにする、そんなことは、ただのマナーだろう。万事が万事、この調子だった。

銀杏も葉を落として始めたある日、小此木からメールが入っていた。動画にしかないボクシングの試合を父親に見せたいのだけど、そういう方法はないだろうか、というたわいもないものだった。さと美はそのやり方を知っていたが、説明が込み入るし、話が早いだろうと検索のワードを送った。

『わかりました。さと美さんにも、何か送りましたか』

という返事がきたが、住所を教えるのも嫌だし、本を読んだ今となっては、言外の意味が含まれている気がして、打っ棄っておいた。

そのうち、さと美は三つ年下の知り合いができた。青山は、さと美の周りにはあまりい  
なかつたタイプの、喋りが達者で、いかにも女にもてそうな垢ぬけた男だった。恵梨香は  
まだ独り身であったので、誰か紹介できないか、と打診すると、

「ちょうどいい男がいる」

というので、四人で飲むことにした。

連れてこられた半田という男は、ジャケットにストラックスでやってきた。青山よりもひ  
とつ下だというが、すでにその腹ははちきれんばかりで、到底年下とは思えぬ貫禄だ。青  
山も細くはないが、これは…と、さと美は思った。

「今日は俺はそういうのじゃないから」

としきりに青山が言うので、さと美もその心づもりで半田を盛り立てようとするのだが、  
打てば響く、という調子ではなかった。恵梨香は露骨に半田を避けて、青山に熱心に話し  
かけて、また大仰に笑うのだ。

半田は、この歳まで女性と付き合ったことがないようだった。しまいには半田までさと  
美の地元に行きたいなどと言い始めたので、参った。

店を出ると、恵梨香は青山の隣にべったりだった。仕方がないので、半田に声をかける  
と、データベースの話を振られたので、ざっと通り一遍の話をすると、半田はちつとも分  
へ向かった。車中で、半田から、

「今度ご飯にいきましよう」

というメールを受け取った。時間的に、まだ他のメンバーと一緒にだろう。

「そうですね」

と短く返した。

翌日、

『昨日はおつかれでした。半田さん残念でした』  
と青山からメッセージが入った。

『そうですね、恵梨香の好みじゃなかったようで、本当にすみません』  
とさと美は詫びた。

『あのあと、恵梨香ちゃんと二人で飲みに行つて』

『やっぱり、そうでしたか』

予想はついていた。それで、少し話がしたいので、近いうちに会えないかということだ  
だったので、三日後に約束をした。

バーのカウンターに並んで座ると、直ぐに先日の飲み会の話になった。半田はやはり、  
女性と付き合つた経験がないそうだった。

「半田さんからご飯に誘われましたよ」

「ああ、あれ、僕らが出せつて言つたんです」

青山が笑いながら言った。

「やっぱり」

「でも、半田さんは、藤田さんは無理だよ、つて言つてました」

さと美は反応に困った。

「それで恵梨香はどうだったんです」

「ああ、あの子ねえ。反省会したいつて言うから、僕結構ダメ出しして」

よく訊くと、恵梨香は青山に、私じゃだめですか？と迫つたようだ。今日は半田のため  
にきたから、と青山が固辞すると、じゃあさと美がいいのでしよう、とかまをかけられた  
という。

「大変でしたね」

飲み会での恵梨香の様子から、手に取るように状況がわかった。

「僕が彼女の家の近くまで送つて行つて、大通りでタクシー捕まえてじゃあつていたら、  
ものすごい顔されましたよ」

「それは、家まで来ると思ってたんでしょ」

「でも僕、そういうの嫌いなんで」

青山は顔をゆがめて酒をあおった。

「なんだか、これまでも、そうして家に呼んで、ひと晩を過ごして、次の約束もなく、また家に来て、そんな付き合いしかしてこなかったみたいで」

そこでグラスを置くと、

「つまりは、セックスフレンドですよ。そんなのは付き合いじゃない」と続けた。

「恵梨香は寂しいんだと思います」

「でも、半田さんでいいわけでもないでしょう」

青山は煙草に火を点けた。

さと美は何も言わなかった。先日の半田の立場というものを問うているのだと思った。恵梨香は、自分の肉体が、女であるということが、男の抗いがたいところを刺激すると信じているのだ。それを頼りに、渴きを凌いでいるのだ。そしてまた、そのかりそめを確かに必要とする男も居る。でもそれは、青山ではなかった。

店を出ると、青山がタクシーを呼んでくれた。

### 十三

暮れに、SSSを通じて小此木からメッセージがきた。どうやら、小此木もSSSをはじめたようだった。

『プロフィールが違うから、自信ないんだけど、藤田さん？』

と、挨拶もそこそこに、こちらを探るような内容だった。プロフィールが違う？と、さと美は首を傾げた。そういえば、小此木には歯科助手を名乗っていたのだった。面倒なのでそれは取り合わないことにした。名前で検索をしてメッセージだけ超越すのも、あまりいい気分ではなかった。

『お久しぶりです。お元気ですか？』

『僕は相変わらず婚活パーティーに行っているんですよ。馬鹿でしょう』

小此木は四十八になったはずだ。

『どうですか、いい出会いはありましたか』と水を向けると、

『僕はもう常連になっちゃって』

とパーティーの話をはじめた。

小此木とのやり取りは、ぼつぼつと続いた。さと美は未読にしておいて、気が向いたときにだけ返信を打った。気分が鬱して、あまり体調が芳しくなかった。世の中と繋がっているということが、滅入ってくるのだ。恵梨香ともあれから会っていなかった。

ターゲットが変わると、小此木の本性がそこかしこに見て取れた。

『実は、二十七の、長身の素敵な人とカップルになって』

と、浮かれたメッセージを超越したかと思うと、

『でも、カップルになったその日に、うちに来てくれて、僕が嬉しくて彼女を抱きしめて、愛してる！貯金はあるから結婚しよう！って言ったら、引かれちゃって。エッチもさせてくれませんでした』

などと、ふざけているのかと思うようなことを言う。

『女性なら、体目当てで寄ってくる男というのもいるのでしょし、まずは誠意あるお付き合いをのぞんでいることとお話するのが良いのではないでしょか』

さと美がやんわりとたしなめると、

『そうですね。初心な子だから、慎重にせめたほうがいいですよ』

また、見当違いな答えが返ってくる。初心でなくとも、結婚というのは一大事だろう。出会ったその日に心を決められるものだと思うているのだろうか。しかし、さと美もラブホテルの前で懇願されたのだった。



『メールに返信がきません。ブスだったらとつくに切ってるけど、もう少し待ちます』  
小此木の理論では、いいなと思う人がいれば、その人を待たせないのが本筋という話なので、いついつから、もう何時間と微細にすべて記憶しているようだった。現実には、小此木の意中の女性は住み込みで仲居をしているというのだから、携帯など触る暇のないことだってある。それに、彼女にはもう「引かれて」いるのだ。

仲居という仕事についても、小此木はこんなことを言っていた。

『彼女は典型的なワーキングプアだから、年齢の差を乗り越えてくれることを祈る』

さと美はこれには、怒りすらおぼえた。好意を持っている相手を、侮辱するような発言をして、自分は彼女の鼻先にぶら下げられた尻頭付きの鯛のつもりでいるのだ。ああ、自分も

そう思われていたのだな、とも思った。

結局待ちかねた彼女からのメールは、

『小此木さんは早く結婚したい人のようですが、私はゆっくり時間をかけて決めたい』  
という断り文句だった。小此木は、

『いえ、僕も結婚は焦っていません』

と泡をくって返信しようだが、そんな嘘、つくだけ無駄というものだ。小此木が彼女と出会ってから、一週間しか経っていなかった。

小此木はそれからも精力的に出会いの場に出掛けているようだった。さと美は体重が減り始めて、通院以外は、ほとんど外に出なくなっていた。再入院、という話も出ていた。富山は雪が降るといふ。小此木の精力の、何者であるかがさと美には不思議だった。

『昨日、教師をやっている人がうちにきて、エッチをしました。でもあんまりタイプじゃなかったの、もう連絡が来ないといいなあ。この間の女性と比べると、なんだかお母さんみたいなんですよね』

と、小此木から連絡がきていて、さと美は目を丸くした。小此木の世代のお母さんといえば、お婆さんの年齢ではないのか。一体この人は、自分をいくつだと思っているのだろう。

『好みじゃないのにしてしまっただけですか。それは連絡が来るのではないですか』

小此木は、

『僕は騒ぎ立ってないタイプかどうかは、すぐにわかるんです』

とおかしな前置きをして、

『久しぶりに女性と肌を合わせて、すごく細胞が生き返った感じでリフレッシュして、よく眠れました。藤田さんはそんなことはないですか？』

と続いていた。そんなことはついぞ感じたことも無かったのだ。

#### 十四

さと美の二人目の夫は、さと美が三十六のときで、外資系コンサルティング会社でコンサルタントをしている、やはり六つ下の小池譲だった。滋賀出身で、やわらかい関西弁を喋る温厚な男だ。

小池は、淡白な性格で、付き合ってきた女性の数もそれなりにいたが、セックスには一種のコンプレックスを抱えているふしがあった。それは、初めての夜、挿入がうまくいかなかったことで増幅されたようで、以降は、さと美が積極的に小池に奉仕した。

彼とは三年同棲のち入籍した。一度プロポーズされたのを、さと美は病気を理由に断っていたが、その一年後、「やっぱり結婚しよう」というので、今度はさと美も領いた。

結婚式はハワイで、ファーストクラスで向かった。実は式の段取りはすべて夫が決めて、さと美はドレスを合わせにしかいかなかったのだが、この時も、さと美は鬱があまり良くなかった。式が終わってからの食事会の途中で気分が悪くなり、途中で単身ホテルに戻った。その頃さと美はウェブ系企業でエンジニアをしていたのだが、トップダウンの案件を

取りまとめることとなり、帰りが遅く、終電が続くと、もう帰らずに、会社に寝泊まりをしたりなどもしていた。気晴らしにはじめたソーシャルゲームに給料をだいぶ使っていた。夫と暮らすうち、パニック障害の兆候がはじめて、さと美は休職を余儀なくされた。夫は、

「無理に働くことは無い、専業主婦になっても十分な収入があるから」

と言って、食事などもコンビニのものなどを買ってきてくれたが、職を失うということは、さと美には耐え難い恐怖で、数年鬱病を患っている身には、自分の最後の矜持に関する問題だった。

とうとうコンビニでの買い物もままならなくなると、さと美はソーシャルゲームにいよいよ執着し、課金額が二桁の月が続き、夫は音を上げて、

「このままでは暮らせなくなる」

さと美を叱責した。さと美が首つりに失敗したのはこの夜だ。ドアノブにスカートやタオルをつなげた紐をくくって、反対側から首を吊ろうとしたのだが、ドアノブが跳ね上がり、そのまま床に転落した。何事かと見に来た夫は状況をすぐに悟った。離婚届が送られてきたのは、入院中のことである。

何度かの調停を重ねた。夫はさと美から慰謝料が取れると思っではじめたらしいのだが、法的にはさと美には過失がなかったため、逆に夫が慰謝料を請求される身になり、そうすると、夫はその慰謝料をいくらまで値切れるかという交渉をはじめた。さと美はずっと生きた心地がしなかった。四回目の調停を前にして、さと美は入院した。

「このままでは生きている気がしないから、終わりにしてほしい」

と訴え、傍から見ると、さと美側が折れた形になった。

途方もない虚無感がこの身を震わして、とても耐え難いというと、医師は、

「それはやはり、普通の方でも離婚というものは大変なことですから」

と言って、投薬の量はそのままだった。

離婚して二か月後、さと美は新宿で声を掛けられ、初めてナンパについていった。男は圭太と名乗り、㊦大卒の、メガバンク勤務の二十九歳だと言った。本当かどうかは疑わしかったが、スーツをパリッと着こなしていて、肌はほどほどに日焼けをしており、短髪を整髪剤で整えて清潔そうな見た目だったので、お茶を一緒にした。圭太の話を聞くと、

「週に一回は合コンしていて、金曜の夜はクラブでナンパする」

ということなので、ずいぶんやり手だ。路上で声をかけるのは、最近仕事が忙しかったので久しぶりだという。さと美は年齢を聞かれ窮したが、

「見たまんまの年齢だと思う」

と言ったところ、

「二十五ぐらい？」

とだいぶ下に見積もってくれたので、

「それより少し上、二十七」

と大胆な嘘をついた。もとより、本気になる相手ではない。

さと美はお茶のあとカラオケに誘われ、そこで、さと美ばかりが歌って、圭太はさと美のことをあれこれ訊いてくるので、さと美はホテルに誘われるのだろうかど緊張してきた。やはり、話はセックスの話になり、さと美が、

「セックスのうまい下手は、キスをすれば大体わかる」

と言ったら、圭太が顔を近付けてきて、唇を重ねた。

ホテルに行くか、行かないかでしばし押し問答になった。圭太はセックスを「コミュニケーションの一種」だと強調し、構えることは無いと説いた。さと美は圭太の理論に納得したわけではなかったが、

「ここまできて、行かないのも面倒な女だから、行く」

と、おかしな世間で、ホテルに行くことになった。

圭太は部屋に入ってもソファでくつろいでいて、テレビの画面をなんとなく見ながら、

「これはタイプじゃない」「この子もダメ」と、厳しく評価していた。さと美がシャワーを浴びると、圭太も続いて浴びた。さと美はまだ緊張していた。圭太がさと美を抱き寄せ、口をつけたまま体を愛撫した。上手いなとさと美は思った。

挿入の前に、ペニスを舌でしゃぶると、その都度圭太は素直に自分の欲求を口にした。きちんとコンドームをつけた。

終わってから、

「彼女は作らないの」

とさと美は尋ねた。圭太は、

「だって、付き合っちゃうと、別れたらそのままじゃない。友達でいたほうが、一人の子と長続きするでしょ」

と珍妙なことを言った。長続きというのは、セックスできるでしょ、という意味で、つまり、一人と付き合うのは気が重いと意味に解釈した。圭太はそろそろ経験人数が百人を超えるはず、数えていないけど、と付け加えた。

圭太はそれからも、さと美をたびたび誘ってきた。さと美は圭太の、乱交パーティーをやったとか、女子大生と合コンして、ブスばかりだったから一次会で消えてクラブへ行った、という武勇伝を別世界の出来事ように楽しんだが、セックスのために、腰を上げる気にはならなかった。してみると、自分は、セックスをするのは容易いが、大してセックスが好きなわけではないのだろう。

さと美は小此木に返事をするのをやめた。吉村とのメールも、やがて途絶えた。趣味を再開すると、次第に体重も回復してきた。ああ、時間をつぶしてくれるのは、別に人でもなくても良かったのか。と思った。